学びをひろげる（第 35 回）

※　○は、自分以外の参加した人の数です

（わたしと○（まる）人の会）

日　時　　2020 年 11 月 21 日（土）（1 時 45 分～5時）
場　所　城東区民センター4 階　中会議室
〒536-8510 大阪市城東区中央 3-5-45　TEL06-6932-2000
参加費　　500 円（会場費・運営費等）※学生は、無料です。

一人で拡がらない学びを○（まる）人が集まり、多様な人たち（年齢、国籍、職種など様々な人たち）との出会い・対話を通して自分の学びを拡げ、授業づくり・教材づくりをしませんか。もう一度、教育・授業のあり方をていねいに見つめ語り合いましょう。

地下鉄　長堀鶴見緑地線・今里筋線「蒲生四丁目駅」1番・7番出口　徒歩約 5 分

京阪電鉄　野江駅　徒歩約 8 分

前回　第 34 回の内容

〈スタッフ　松井直哉〉

第 34 回学びの会は、私が松森さんの最新著書の『街角の共育学』を読んで触発された言葉を「お題」として提示し、「世間話」をしようと思って企画した。私の当初の意図は『街角の共育学』からスタートするものの、『街角の共育学』から離れることをいとわない「世間話」にしようというものだった。だが思ったほど離れることができなかったし、終わった直後は自分の言いたいことが十分言えなかったという感じがしていた。まあ『街角の共育学』からピックアップした言葉が「お題」なのだから、松森さんは当然著書の内容に記憶を戻し話す。だから、『街角の共育学』から離れられなくて当たり前なのだけど。記録カメラが動く中、話の進め方のバランスも考えなければいけないし、その上自分の言いたいことを言うというのはかなり難しかったというところだろう。

一応進行を任されているので、少しでも話が途切れて間があくと、自分が言葉をつなぐのか誰かに振るのか打ち切って次の話題に変えるかの判断を迫られているようで焦ってしまう。松森さんに振ると松森さんは『街角の共育学』の方に話を引っ張っていく。かと言って私が話をとって延々としゃべるわけにもいかない。相手の言うことを聞き、こちらの言いたいことを伝え、それをすり合わせて新しいものを作るという作業は面白いけど、今回は私にとってかなり難しい作業だった。一般的に進行役と発言者が分かれているわけが改めて良く分かった。

お酒を飲みながらの「世間話」なら得意なのだけど…。（相手は迷惑がっているのかもしれないけど）

〈スタッフ　松森〉

いつも思うのだけれど松井さんの話はとにかく面白い。例えば「子どもたちは話を聞かなくなったのか」のお題のときに松井さんはこんな語りをします。――話を聞けへん子どもたちが悪いんとちゃう。話し手の問題や。僕が小学校の時に一番覚えてるのは戦争の話やねん。沖縄出身のヒガ先生が、沖縄戦のとき敵から逃げるために向こうの島に向かって泳いでたとき、アメリカ兵につかまったという話。おんなじ話でも、僕らは何べんでも聞きたかった。僕は時間さえあれば子どもらに自分の人生を語ってた。高校のときに自分の家が火事になった話。消防車が来て消火するのを手伝ったとか。弟が交通事故にあったことや、小さい時に川でおぼれた話とか。そんな話をすると子どもらはすごく聞くねん。テストする時間がもったいないねん。その時間があったら、子どもらに自分の話をいっぱいしてやりたいねん。――というように、松井さんの話はいつも教育現場から、子どもの実態から、自分の生活経験から言葉を選んで語ります。だから私たちは話の一つ一つにうなずきながら、納得し、その面白さに魅了されてしまいます。

こういうものが「対話」というのだろうと、改めて感じました。

拙著の『街角の共育学』を通して豊かな対話が生まれたことが嬉しくてたまりませんでした。

ユーチューブで公開
https://youtu.be/YkO7pdHSpQ8

今回　第 35 回は

「前回の『対話』のつづきをしてほしい」と多数寄せられた声に応えて（というのはウソ、ジョークです。ごめんなさい）。でも、お題を上げて参加者で自由に意見交流する、対話する研修会の方法を発見することができました。今回は拙著『街角の共育学』からも離れて、スタッフの松井さんが日本の教育をにらんで、自由に選んだ「お題」で、「世間話」のごとく語り合おうということになりました。気楽に参加してください。きっと面白いですよ。

「学びをひろげる」スタッフ　　松井 直哉、　松森 俊尚
連絡先　松森　（090・1960・3469　matumori@crux.ocn.ne.jp）

★次回第 36 回研究会は、2021 年 1 月 16 日（土）午後 1 時 45 分～城東区民センター4 階小会議室にて★